

橋倉の歴史と文化財

H26. 2. 16

(令 7. 1. 10 修正)

山辺歴史研究会 宮坂昌憲

1. 橋倉の昔

(1) 橋倉のルーツは？

- 「橋倉の郷」・「中河原の郷」
元龜・天正の頃（1570年代）の史料に、「橋倉の郷」・「中河原の郷」が初見する。これが橋倉村、中川原村へと発展すると思われる。その後、慶長19年（1614）の記録に、橋倉村、中川原村、が見える。
- 初期の橋倉村と中川原村
寛永15年（1638）、時の松本城主堀田正盛は、領内の村々から検地名寄帳を差し出させる。この時の橋倉村は、田畑合10町3反4畝24歩、粃高141石2斗2合（1石=1000合）（屋敷11軒、とある。中川原村の記述はどこにも見られない。おそらく両村は同じような場所にあり、1つの村のようになっていたのではないかと考えられる。
橋倉村はどこにあったか。記録がないのではっきりしたことはわからないが、言い伝えによると今の八龍橋の北のあたりという。
山辺小学校のすぐ北に「中川原」という小字名が残っている。これがかつての橋倉村の位置を推定する手がかりとなりそうである。
- 橋倉村・中川原村の転退
言い伝えによると、寛永15年（1638）薄川が大洪水して、橋倉村・中川原村が流失、橋倉村は現在地に移転、中川原村は廃村となった、という。
この年の薄川の洪水については、どこにも当時の記録がない。上記の言い伝えは、あくまでも言い伝えとして受け止めるしかないのではないかと。

(2) 江戸時代の橋倉

- 山家組（17ヶ村）属する。
 - ・ 天保3年（1832年）の山家組の村々（ ）内は村高で石数を表す。

入山辺	橋倉村 (158)	南方村 (302)	桐原村 (610)	北入村 (326)	
中入村 (509)	里山辺	林村 (372)	大嵩崎 (新田) 村 (28)	南小松村 (316)	北小松村 (334)
薄町村 (437)	兎川寺村 (151)	荒町村 (263)	新井村 (222)		
上金井村 (290)	藤井村 (204)	湯原村 (169)	下金井村 (123)		
- 検地帳にみられる地名（小字名）―― 慶安4年（1651年）

山田	清水田	石原	道添	沢またぎ	八子	そり田	川原田	中嶋	
石神	木下	柴原	神田	竹原	日陰	馬ノ口	山畑	銚塚	うつ

ぎ田 他

○ 橋倉村の人口の推移

天明 ^{てんめい} 2年 (1782) 165人	→	文政 ^{ぶんせい} 5年 (1822) 178人	→
文久 ^{ぶんきゅう} 2年 (1862) 218人	→	慶応 ^{けいおう} 3年 (1867) 222人	→
参考 [明治2年 (1869) 229人		明治7年 (1874) 211人	
昭和47年 180人		平成4年 155人	平成26年 124人]

2. 橋倉の文化財

(1) 遺構

① 小笠原氏城跡及び関連遺構

○ 林大城

林大城は、林町会と橋倉町会に境を接する山全体をさし、大嵩崎^{おおつき}集落をはさんだ反対側の林小城とともに、小笠原氏城跡(おがさわらししろあと)として平成29年に国史跡に指定された。

築城は、1440～1460年頃と推定され、山頂の主郭とそれを取りまく土居や石積みをはじめ、幾筋もの空堀、郭などの遺構がみられる。天文19年(1550)小笠原長時の代に、甲斐の武田氏の侵攻の前に城での攻防もなく自落した。

○ 水番城

橋倉集落の東の尾根上に郭があり、「林大城の重要な水の手を守る出砦」といわれる。主郭を中心に、土塁痕、石積み、空堀等の遺構が見られる。南方集落の東部から秋葉神社の参道を登り、そこから南の尾根を進み主郭に到るのが本道である。

○ 水路跡及び化粧井戸

林大城は水の手^{かじはざわ}に遠く、橋倉の谷のだけでなく更に東の梶葉沢の水も水源とし、等高線に沿って橋倉集落を迂回するようにして、大城まで引水したと伝えられている。その導水路跡といわれるところも残っているが、まだ本格的な調査はなされていない。

大城の主郭を東に数十メートル下ると、『化粧井戸』と名付けられた井戸跡が残っている。引水した水の「溜め井戸」と考えられる。



林大城主郭



水番城跡石積

② 十輪院跡

じゅうりんいんあと

いろいろな^{れいじょう}霊場めぐりの中でも、「四国^{へんろ}遍路」はよく知られている。その四国霊場を松本の里にうつして、諸寺院をめぐり^{おが}霊仏を拜むことで、同じようなご利益^{りやく}がえられるという^{しんこう}信仰があった。天保5年(1834)の「新四国略図」なるものがあり、松本平88^{かしよ}箇所の寺院や堂等が載っている。その中に^{こうたくじ}広沢寺(七十八) ^{じげんじ}慈眼寺(七十九)、に続いて、**十輪院** (八十) **ハシクラ ジゾウ**とある。80番目の札所は橋倉の十輪院で本尊は地蔵菩薩、ということである。この十輪院跡と推定されるところはあるが、その実体についてはまだよくわからない。

③ 橋倉学校跡

明治5年の学制^{はつぷ}発布をうけて、明治6年7月、南方村^{ずいこうじ}旧瑞光寺に「南橋^{なんきょう}学校」が開設された。学区は橋倉村^{みなみがた}・南方村で、校舎は寺の^{はいどう}廃堂が利用された。

明治9年1月、南橋学校は橋倉地籍^{ほこづか}鉾塚に新校舎ができて移転する。それとともに学校名も**橋倉学校**と改められた。

明治19年4月小学校令公布。橋倉学校は、里山辺村にできた山辺学校に統合され廃校となった。

学校跡地^{あとち}は、現在はぶどう園となっている



橋倉学校跡

(2) 神社^{ぶっかく}仏閣 等

① 橋倉諏訪神社 (橋倉諏訪社)

祭神は、建南方^{たけみなかた}刀美^と命^{みのみこと}である。創立^{そうりつ}年代は不明であるが、金華^{きん}山^{かざん}城主小笠原氏の守護神であったといわれ、本殿背面に小笠原氏の紋所三階菱^{もんどころ}が^{びし}刻^{きざ}まれている。本殿横にある石灯籠^{いしどうろう}には、宝暦7年(1757)の^{ほうれき}銘^{めい}がある。卯年、酉年には御柱^う祭^{とり}が^{おんぼしらせい}執^とり行^とわれる。(後述 地域行事の項「御柱祭」参照)



橋倉諏訪神社

② 祠ほこら

○ 蚕玉様こたま

城山中腹のアンテナ下方の石碑群の中にせきひぐん 祠ほこらがある。祭神は蚕玉大神こたまおおかみ。蚕玉祭りについては地域行事の項参照。

○ 山の神

山に入って仕事をする者を守護する神様である。山で仕事をする人が多かった入山辺地区には山の神様が数多くまつ 祀られている。橋倉にも、橋倉諏訪神社けいだい 境内右奥にその祠ほこらがある。

○ その他（同姓等で祀る祠ほこら）

天白様てんぱく（小出同姓） 九頭竜様くずりゅう（東武井同姓） お稲荷様いなり（赤廣同姓）
お稲荷様そうたいぞう（西武井）)

(3) 石造物 等

① 道祖神

道祖神は、村や家に悪霊あくりょうが入ってくるのを塞ぐ神、子孫繁栄しそはんえい、旅の安全の神とされ、村の境や道の辻つじにまつられている。松本地方では、文字碑もじひと双体像そうたいぞうに大別されるが、入山辺では双体像が多い。橋倉のものは文字碑である。



道祖神 馬頭観音 青面金剛

② 馬頭観音

馬頭観音は、「六観音」のひとつで、頭に馬頭をのせていることから、近世においては庶民から馬の守護神のように思われ、大切な馬の健康や死んだ愛馬の冥福を祈る対象とされた。馬を飼う家や、馬を利用する職業集団では、馬頭観音像や「馬頭観音」「馬頭観世音」などの文字を刻んだ供養塔をたてた。建立場所はたいてい死馬を葬ったところか、山道などの交通の難所や追分けなどである。

橋倉の村下カーブの石垣上には、17体の馬頭観音が並んでいるが、これは昭和44年、一の海馬取沢にあったものを移転したものである。かつては馬を使って仕事をする橋倉の人達が、山辺の谷の奥まで出かけていたようである。

また、町会案内版下の文字碑は、高さ117cmで山辺地区最大級の馬頭観音といわれ、碑の裏に嘉永元年(1848)の銘がある。この馬頭観音は橋倉村で建てたものであるが、個人が建てることもあった(武井氏 小出氏等)。

③ 二十三夜塔

「月待ち」といって、十五夜、十六夜、十九夜、二十二夜、二十三夜などの特定の月齢の夜、「講中」といわれる仲間が集まり、飲食をともにしたあと、経などを唱えて月を拝み、豊作、病氣平癒、良縁などを願う行事がある。この中で特に普及したのが二十三夜に集まる二十三夜行事で、二十三夜講に集まった人々の建てたのが、二十三夜塔であり、橋倉には2基の文字碑がみられる。

④ 青面金剛(六臂青面金剛)

青面金剛は、中国の道教思想に由来した庚申信仰の中で独自に発展した尊像で、庚申講の本尊とされる。

庚申講とは、「庚申待」の行事をする人たちの講である。道教では、「人体の中に三尸の虫が住んでおり、庚申(かのえさる)の日(60日に一度)に、人の眠るのを待って天帝のもとにいき、その人の平常の罪過を告げるから、その人の寿命が縮められる。そのためその日の夜は眠ってはならない。」とされ、庚申の日の夜は人々が集まって飲食を共にし、念仏やご詠歌や物語り等をして徹夜で過ごすという風習があった。これが「庚申待」である。

庚申講の人達が供養のために建てたものが庚申塔で、本尊である青面金剛の像を刻んだものや、庚申塔や庚申という文字を刻んだものがある。橋倉のものは青面金剛像で、宝暦7年(1757)の銘がある。

庚申塔は、庚申講を3年18回続けた記念や、1年間に7回庚申が訪れる七庚申の年等に建立されることが多かったといわれるが、中には庚申(かのえさる)年に庚申塔を建て村中が集って盛んな祭をした例もあるという。

庚申塔の祭りをする「庚申講」は、はかつては村では最も大きな組織で、今でも「お庚申仲間」と呼ばれる隣組的な組織が残っているところもある。

⑤ 念仏供養塔

名号塔とも言われ、南無阿弥陀仏の六字の名号が彫られている。飢饉や悪疫に対する祈願や犠牲者の供養、村人の安全等の願いをもって建てられたようである。

橋倉には二基あり、特に村入口にあるものは、台座を除いても高さ1.7mもあり、町

会最大の石造物である（享和4年 1804）。町会案内板下のものは、享保17年（1732）と古い。

⑥ 梵字供養塔（光明真言供養塔）

梵字が刻まれた供養塔で、このような供養塔は他に類を見ないという。裏に文化8年（1811）の銘がある。

⑦ 御岳信仰関係石碑群

城山中腹にある蚕玉様の祠の左右に、御岳信仰に関係した石碑が並んでいる。八海山大神、三笠山大神、等で、御岳山にはその神社の社殿がある。また越後の八海山は木曾御岳信仰の霊山として知られ、その麓には八海山尊神社がある。

これらの碑は、八海連という講の人達がたてものである。この八海連は蚕玉信仰にかかわる蠶影山神社（本宮は筑波山の麓にある）碑も建てている（明治20）。

⑨ 大日如来碑

坂下カーブ石垣上の馬頭観音群のなかにある。馬頭観音と同じような願いや目的をもって建てられたものであろう。慶応卯年（慶応3年）（1867）の銘がある。

（4）地域行事 等

① 御柱祭

卯年、酉年に行われる橋倉諏訪神社の御柱祭は、町会（氏子30数戸）挙げての大事な行事となっている。昭和30～40年代には、御柱行事を中心的に担う御柱青年会の解散等もあり、一時衰退したが、以後復活し賑やかに行われるようになった。

以前はこの御柱祭も、御柱の「山出し」から、本番の「建て御柱」までを2年がかりで行われていたが、今は1年で行っている。時代の流れの中で、氏子や町会の事情によるものである。

この御柱祭は、平成12年に松本市の「重要無形民俗文化財」に指定された。この祭りの継承を通して、町会員（氏子）の絆をより強くし、地域発展の力としていきたいものである。

② 蚕玉様

現在の蚕玉祭りは、春の豊作祈願祭、秋の収穫感謝祭の日に併せ町会を挙げて行い、城山中腹にある祠に当番（常会）でお参りをしている。

昭和14年の、入山辺村の各所で行われている蚕玉祭りの調査記録があり（「山家民俗誌」平成8年入山辺公民館刊）、橋倉の蚕玉祭りについては、次のように記されている。

神名は蚕玉神で、俗に「こたまさま」とよばれる。組数は1つで、30軒の蚕を飼う全集落民が成員である。その年の蚕の当たることを祈る。春祭りは5月15日、秋祭りは10月1日に行う。祭主ならびに宿（頭屋）は、順番につとめる。蚕玉神のある山で、お供物をし、神主が来て神事をする。「えんぎ笹」を参会者にわけてやる。「きんこ」（繭玉）は各自でつくってあげる。式後頭屋へ来て酒宴をする。祭費は持寄りですべて1戸当たり30～40銭である。

上記の記述から、盛大な祭りの様子がわかるとともに、当時の生業として盛んであつ

た養蚕の様子も^{しの}偲ばれる。

③ 三九郎

三九郎は、昔は男の子の正月の行事で、三九郎焼きの日も1月の14日か15日と決まっていた。^{しん しん}芯（神）木の切り出しから、三九郎作り、三九郎焼き、焼いたあとの木の始末まで、全部子どもたちだけでやり、大人が手を出すことはなかった。

現在の三九郎は、子ども会の行事として、親の手も借りながら、その伝統的な形体は受け継がれながら行われている。三九郎作りから三九郎焼きの日は、子ども会の事情等から、休日に行われるようになった。

しかし、児童数の減少は著^{いちじる}しく、子ども会だけでの運営は困難になったので、公民館や町会も協力しながら行われている。

④ その他

当入山辺地区には、「事八日」と称する正月の行事が、今でも行われているところがある。橋倉でも、かつてはこのような行事が行われていたのではないかと考えられる。その他^{とりお}鳥追い行事や^{ねんぶつこう}念仏講的な集まり等が最近まであった形跡もある。



馬頭観音 梵字供養塔 念仏供養塔



蚕玉様